

パネル・オブジェ・紙胎器

a2200404 近江恵

+デザインコンセプト+

+パネル+

-十二支と四神、青龍・白虎・朱雀・玄武をモチーフとした。
時を表す十二支と位置を示す四神の配置によって、「動」と「静」を表現している。

+オブジェ+

-鉄をモチーフとした。鉄の持つ磨かれた美しい質感と、原石の持つ荒々しい強さの二面性を対比させ、それらに宿る流れと時間を表現した。

+紙胎器+

-器の胎に紙管を用いるという、表現方法に挑戦した。管の形態を活かして、筒を二つ制作した。一方は樹皮の質感を出す為、錆で表情を付け、塗りの方で表現した。もう一方は管の形態を残し、茶筒にデザインした。



パネル: 四神十二支図

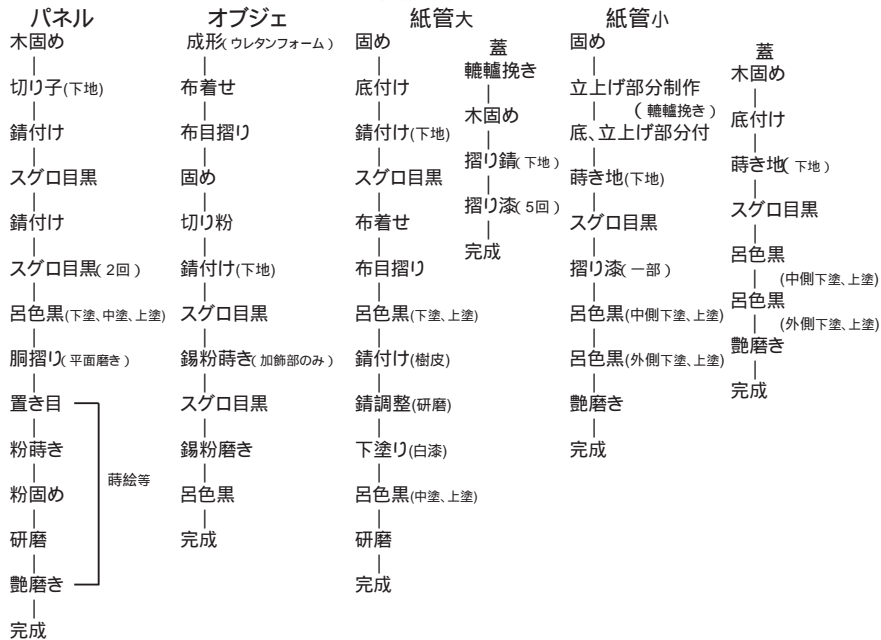


オブジェ: 流星鉄



紙胎器: 茶筒(左) 樹皮表現筒(右)

+制作工程+



+考察と感想+

技法も工程も異なる、三作品を制作してきた中で、漆の表現の広さを改めて目の当たりにした。紙管を胎にした筒の制作には、戸惑いや驚きがあり、形状に悩まされながらも楽しみながら制作出来た。オブジェは、短い期間で作上げた事もあり、稚拙な箇所が多く、見直すところも多いが、限られた期間内で制作したものが福島県総合美術展に於いて入選する、という結果を戴けたということに、自信が持てた。中でも、一番心血を注いだのは、パネル表現である。図案がなかなか決まらず、色彩設計にも細部まで気を遣い、色と技法の組み合わせに工夫をした。一つ一つの絵が細かく、筆を滑らせるのに神経を尖らせて作業をした。塗りから、蒔いて磨く工程それぞれに気を配り、日々の制作過程で生き生きしてくる生き物たちを見るのが嬉しかった。漆の作業は、毎日の積み重ねである。知っているつもりだったが、時間に追われる事になってしまった。集中力が要り、微細な調整と細かな作業、時には大胆さも必要で、時間と折り合いを付けながらの漆の仕事が好きになった。細かいモノ好きなわたしには、少し向いているかも知れないと感じた。漆との関わりを忘れずに、会津の思い出を忘れないでいたい。